

# パンタナル通信

南北米福地開発協会 会報 2005年9月1日発行 第24号



活躍するボランティアの方々。(吉沢忍さん,前野君、高橋君 7月15日撮影)

## パラグアイ訪問記

(前号からの続き)

我々は再度中田さんと共に基地全体を見て回りました。昨夜行けなかった奥地の道路(基地から5km先のラタイ牧場跡の先に門扉をつけ、パイアネグラに向かつて1kmだけ道路が出来あがっている)は、アレマンの牧場の柵にそってレダ側で10kmの道がブルだけ入れて作られかけて中断され、草が茂っていました。柵と整地された道路をきちんと作る日がそう遠くなく来るでしょう。その時には約束通り、ブルトージャーを購入して具体化したと中田さんは言っていました。本来ならブルはとくに購入していたはずですが、代わりに今まではトラクター三台を導入して整地作業を進めてきました。その間は、ブラジル人のブルを依頼して椰子の木を処理し藪を片付け、土を均してきましたが、今は彼らがブルごと帰国してしまっています。養殖場予定地では、高級魚のピンタード(市場値1kg三万ガラーニ=5\$)の養殖を是非チャレンジしたいと熱く中田さんは語っていました。今日もパラグアイ川でスルビ(ピンタード)が数匹釣れ、早速生簀に放し飼いにされました。

これから魚の生態や餌の研究を重ねていくそうです。

午前九時、我等四人(中田、三石、吉村、飯野)は、エスペランサ村上流のインディヘナ村「カトーセ デ マジヨ村」に向かい、一時間半程で着きました。そこは更に貧しく、百人程の村人の内、五十人が子供、その中の三十人が小学生です。これもかつて或るボランティア隊が建ててくれたという椰子の木の一室の校舎があり、低学年組、高学年組が背中合わせに数人ずつ授業を受けていました。独身女性の校長先生、三十代の男性先生の二人で行われていました。この夏の学校建設と青年ボランティア隊が寝泊まりする場所など、検討打ち合わせを現場で行いました。計画では教室として6m x 6mが二つで、日差しや雨を避けるため、周囲1.5mは庇を出し、床のコンクリートは周囲3mを巡らす設計です。犬が何匹もいましたが、皆やせていて、食料事情の貧しさを感ぜさせられました。産業は何もなく、今までソーラシステム発電装置や、川の水を風車で汲み上げて各家に水を供給する装置も、かつてボランティア団体が作って提供しましたが、壊れていて

使えないまま放置され無用の長物となっていました。

基本的に機械類や、少しでも費用のかかるメンテナンスは、彼等には向きません。小さなミュージアム（博物館）も寄贈した団体がありました。今は何も省みられることなく、かび臭い残骸として残っていました。観光客が誰も来ないので彼等にとつて価値がわからないということ、ホコリを被って陳列されていた物も荒れ果てて壊れていました。

我等が建てる学校が廃墟にならないよう、しっかりと村の人々を教育しておかねばなりません。が、難しい管理はなく、実際に必要な設備だから、無駄になることはないと確信します。是非青年ボランティア隊で刺激を与えていきたいものです。

帰りにエスペランサ村に寄りましたが、昨年献納した中学校の回りにささやかながら花壇を造ろうとしているの  
がわかりました。  
校長や先生方とも交流し  
てくる事が  
できました。



### 六月二十五日 今日も快晴

気温が三十 上がりましたが、日本の蒸し暑い猛暑と比べれば、かえって過ごしやすいレダです。今日は土曜日ですが、ここでは六時半、労働者を集めていつも通りの仕事が始まりました。

十時から中田先生、上山先生と今後のレダの展望について色々打ち合わせました。継続していく為には、一にも二にも、人材と経済です。会員が計画的に積極的レダに来て貢献することが大切です。プラン的には、この五年半の基地のプロジェクトを協力を推進する段階へ移行していく必要があります。農業、牧畜、林業（植樹）、水産（養殖）、メンテナンス（電気、機械、ボート、車、トラクター、浄水場、施設、エネルギー）の各プロジェクトです。農業と養殖の実験場は今、中田先生を中心にほとんど整備が進められています。



農場管理をする舟見亘氏



養殖場はコンクリートは使わず、土を掘ったままの自然の状態です。どんなエサを好み、何を与えていくのが養殖に向いているのか、水温は何度が適温なのか、どういう習性があるのかなど、まだまだ地道に積み重ねて研究していくべきことが沢山あります。例えば、獲ったスルビは食べてしまっただけでなく、その胃袋の中に何を食べているかの証拠があり、それを調べていくことも必要です。ドジョウのようなトウピラを食べる事は、餌にして釣れることからはっきりしていますが、鎧を着けたカスクードも食べていることが分かりました。



今後、行動できる会員は各プロジェクトの関心のあるチームに入り、チームごとにプロジェクト推進の研究会を続け、情報を集め、時にレダに発信してそれを実践していくという計画を検討していく事にしました。勿論、これらプロジェクト以外にも、教育、観光、建設、事業など様々な分野で真剣に取組んでいくべきことが山積みされています。しかも中・長期計画を立てて、地球環境問題を踏まえながら、地域社会や発展途上国に貢献しつつ、我々の子供達にも希望となる、継続的に且つ発展させていけることが重要です。今後とも会員の皆様の一層の関心と実践とご協力を懇切にお願いする次第です。（飯野貞夫「パラグアイ訪問記」より）

### 南北米福地開発協会事務局

〒111-3100  
神奈川県川崎市高津区

溝口三十一 十五

岩崎ビル四階

電話

〇四四 八二九 二八二一

ファックス

〇四四 八二九 二八二〇

## 植樹レポート (高津啓洋報告)

七月四日に成田を出発し、八月四日に帰国しました。今回はモモイロイペー、チバト、ジャカランダなどの花樹からマンゴー、アボガド、イチヂクの果樹まで申し込み本数の苗を植えつけました。

あとの時間はこれまでの木のケアと一本一本にネーム杭を打ち込み、写真撮影をする作業に費やしました。

現在、植樹園の広さは約六・五ヘクタール(二万坪)。八期までの累計植えつけ本数が二千本、植えつけ密度は一本当たり三〇m(五・五平方メートル)です。今植えつけたばかりの五〇cm以下のキバナイペーの苗から五メートルを超える三年ものユーカーリまで、花樹と果樹をとりまぜて一五種類の木の平均樹高は、四年三ヶ月経った現在、目測で二・五mに生育しています。今回すべての木の生育状況、現地の環境条件を精査した結果から、今後の森づくりは新しい段階を迎えることになりました。基本的方向はつぎの三つです。

土地本来の木を森の構成樹の主木とする。2〜3種の主木とそれを支える3〜5種の脇役の木を、現在生育中の樹間に植えて植栽密度を高める。

今後は外来種より土地本来の樹種をより多く植える。これらの方針を立てるのはつぎのような理由からです。

主木の判定は森を百年を越えて長持ちさせる鉄則。

森を再生・創造する場合、混植・密植が原則です。

会員の皆さんの木を保護しながら森全体を永續させるため、土地本来の木を中心にできるだけ多くの種類を追加し、混植・密植の形に近づける。



今年最初に開花したモモイロイペー



パロサントで造った時計をあしらった工芸品

これまでの樹種の植えつけは、一本ごとに大きな穴を掘り、良質の土を別の場所からトラクターで運びこむという膨大な作業量が必要とした。土地本来の木は直植え(じかつえ)ができ、乾燥に強く、継続的な水遣りも必要なし。管理コストを最小に抑えることが可能。今回の植樹行で出会った、パラグアイが世界に誇る銘木を紹介しましょう。

その名はパロサント(スペイン語で聖なる木の意味)。成木になるのに百年、材質は濃い緑色、堅くもなくやわらかくもなく、加工に最適。

しかも香木。ほとんどが最も高価な民芸品の素材として使われます。樹液はリウマチに効くともいわれ(すでに商品あり)、パラグアイでは超貴重種。

今回、自然林の構成樹を調査した際、植樹園西側にこの木が残っていました。

しかも現地の主木の一つであることも判明(主木の他の二種はケブラツチヨとアルガ口ボ)。

次回からはこのパロサントの幼苗を植樹園内に最適密度に植え込む計画です。

植樹に関心のある方は高津地球の緑を守る会事務局長へ

(電話〇四二六一二九 一四四三)



今年最初に花を咲かせたキバナイペー(2001年4月植)